『ONE BOOK ONE LIFE』別冊号1986年9月10日第1号発行

# ろくおん通信

発行日　１９９７年６月１５日

No. 93

発行　盲人情報文化センター 録音製作係

処理を考える（２１）

## 「？」の読み方

「？」の処理ではいろいろと音訳者が迷う様です。ある時は「疑問符」と読んだり、ある時は「語尾を上げて」読んだり、ある時は「省略」したりといろいろです。

墨字を音声にした場合、同音異義語などがある時は正しく伝わらないことがあるので補足が必要になったりしますが、逆の場合もあります。つまり、音声の問題を記号などを使って表現している場合などです。その場合、著者が表現しようとしている内容を、記号をそのまま読んだだけで分かる場合と、分からない場合とがあります。

最近、次のような例文がありました。

・・・この１年ばかり、私の癇に触りつづけているのは、自問型とでも言おうか、あるいは自己確認方式と言おうか、会話の中に、むやみに独り言の《？》が入る喋り方のスタイルである。どちらかと言えば、女の人に多い。たとえば、「小林薫っていいわね。笑っていても、カゲ？　あるのよね。それにさ、あんな純朴？　って顔してててさ、ときどきフッと、冷酷さ？　覗くと思わない？　矛盾？　裏切られそうな怖さ？　あれがいいのよね」といった具合である。どうも気に障る。ストレートに言えばいいものを、一々《？》と語尾を上げて相手の顔を見る。どうやら《・・・・・・とでも言うのかしら》といったニュアンスのつもりらしいが、あまり利口そうには見えない。・・・・

《？》の記号が２回出てきますが、最初と、後とでは同じ記号でも処理は同じにはなりませんネ。

これは、音声の特徴を墨字で表現している為に、音声で表現すればわかりますが、墨字記号を読んだだけでは伝わらない例といえるでしょう。

あなたは、《？》の処理はどうしますか。考えてみて下さい。

## 今月の練習問題　　＜漢字の処理です＞

### 漢字と表現方法

**★暖簾(のれん)の由来**

はじめて北京で冬を越す生活をしたときのことである。

町を歩いていて変わったものが目にとまった。商店やデパートの入口に、分厚いカーテンが入口の幅いっぱいにぶらさがっているのである。人々は「ドッコイショ」とその端をひっぱって、その横の隙間(すきま)から出入りする。出入りしたあとは手を放すと自然にカーテンは閉まる。つまり自動的な防寒ドアというわけである。

これはいかにも北国らしい知恵であり、おもしろいと思ったので、中国人の友人にその名称を聞くと、「ヌアンレン」

という。音だけではわからないので、どんな字を書くのかと聞くと、彼はノートにこう書いてくれた。

「暖簾」

わたしはオヤッと思った。つまりノレンではないか。

それまで「暖簾」と書いて「ノレン」と自然に読んでいたが、日本式の読み方なら、本来はダンレンでなければならない。それをなぜノレンと読むのか考えてもみなかったが、実は暖簾の中国音であるヌアンレンが、そのまま日本にはいってノレンと読んでいたのである。

調べてみると、暖簾は、鎌倉時代だかに中国に留学した日本の坊さんが持って帰ったものだということがわかった。中国では防寒用だから、綿入れのカーテン、つまり「暖かい簾」だが、日本は気候が暖かいので綿をとって単衣(ひとえ)ものにした。しかし名称はそのまま暖簾を用いたのである。そして家の入口にぶらさげたが、日本人には細かい知恵がまわるから、そのカーテンに商店の名をいれてこれが老舗の暖簾になった。さらに、近代になると、これを半分に切って部屋の入口にぶらさげる。もはや暖房用ではない、室内の飾りである。それでも名称は「暖かい簾」として残っている。

わたしのカミさんが、自分の住まいの部屋の入口にこれを下げておいたのだが、たまたま遊びにきた中国の友人が、「これはなんだ」というので、

「これはもともと君たちの国から日本に渡った暖簾の子孫だよ」

と答えると、

「なんと、日本人というのは応用するのがうまいな」

と感心していた。

**★第一次外来文化である中国文化**

漢字が中国から日本に渡ってきたものだということは頭のなかでは承知していたが、こうして物の原形まで知るにおよんで、いまさらのように実感を深めたのだった。

いまご承知のように日本ではカタカナ文化が氾濫しているが、これはいわば第二次

の外来文化であって、第一次の外来文化は古代朝鮮を経由、あるいは直後に日本に渡ってきた中国文化である。それは漢字から動植物、食品、学問、生活文化、制度にいたるまでまことに広範な文明そのもので、わたしたちが日本古来からのものと思っている多くのものが中国からの渡来ものであることに驚かされる。

早い話が稲作は弥生時代に中国の江南地方から伝来したものというのが、ほぼ定説になっているし、毎日飲むお茶も中国が原産である。ついでだが、中国の南方では「茶」を「テ」と発音するところがある。これが南まわりでヨーロッパにいって「ティー」になる。中国の北方では「チャ」と発音する。これが北からロシアや中央アジアに渡ったので、「チャイ」というわけで、いずれにしても茶は中国から南北に伝わっていったのである。日本はそのまま茶(ちゃ)になった。ことばにルーツと伝播の痕跡が残っていることがわかる。

食品で「胡」がつくのは、西域(さいいき)から中国を経由して日本に入ってきたものである。胡椒(こしょう)、胡麻(ごま)、胡瓜(きゅうり)・・・、みなそうだが、胡瓜(きゅうり)にかぎっていえば、いまの中国では「胡瓜(フーグワ)」ともいうが「黄瓜(ホワングワ)」のほうが一般的である。日本では中国の古い言い方である「胡瓜」がそのまま残っているのである。

もともとこれは前二世紀の漢代に張騫(ちょうけん)が武帝の命令で西域、すなわち胡の地に旅をした、そのときもたらしたもののひとつが胡の瓜なのである。その後、四世紀から五世紀にかけ、胡人が北方に入ってきて国をたてた。そのひとつ、後趙(ごちょう)の王が「胡瓜」という名称をきらい、「黄瓜」に改名させたという伝承がある。

また、樹木や草花の名前で、中国伝来のものは非常に多い。桃、栗、柿、梅などはいうにおよばず、百日紅(さるすべり)、合歓(ねむ)などもそのままの文字が使われている。

目に見、手でさわれるものだけではない。精神の世界でも中国の文化は大きな影響を与えた。『論語』、『老子』、『史記』など中国古典の影響はいうまでもないが、わたしたちがいま日常つかっていることばのなかにも少なからぬ中国の古語がある。

『中国人のものさし　日本人のものさし』　村山　孚

## インスリン療法　　＜図表問題＞

＜１＞インスリン療法とは

インスリン依存性糖尿病の患者さんや、一部のインスリン非依存性糖尿病の患者さんでは、自分の膵臓から分泌されるインスリンが不足しているため、注射によりインスリンを補う必要があります。これがインスリン療法です。現在使用されているインスリン製剤は、遺伝子工学により作られており、あなたのインスリンと同じ構造の安全なものです。ただし、健康な人は、インスリンによってある程度血糖が下がると、インスリン分泌が自動的に止まりますが、インスリン注射では、注射したインスリンはすべて吸収されてしまい、血糖が下がりすぎることがあります。このため、患者さん自身や主治医が、食事量や運動量、その日の体調に合わせて、インスリンの量を調節しなければなりません。インスリンの量が多すぎると低血糖になりますし、少ない

と血糖値は下がりません。

＜２＞インスリン製剤の種類

インスリン製剤は大きく分けて３種類あります。１つは透明なインスリンで、速効型と呼ばれているように、速く効いて作業時間が短いのが特徴です。もう一つは少し長めの作用時間を持つ、混濁したインスリンで、この中には中間型、持続型などいろいろな作用時間を持つものがあります。３つめは、１つめの透明な速効型インスリンと２つめの中間型インスリンをあらかじめ混合してあるものです（図１）。

＜３＞インスリン注射の実際

ヒトの血糖は主に食事によって上がりますが、健康な人ではこれに合わせて膵臓からインスリンが分泌され（図２点線）、血糖が下がりますので、一日の血糖の変化は図２の実線のようになります。

糖尿病の患者さんは自分の膵臓から分泌されるインスリンを補うために、インスリンを注射することになります。患者さんの中には、インスリンがほとんど出ない患者さんもいれば、わずかにインスリンの分泌量が少ない患者さんもいます。このように、インスリンの分泌がどのように低下しているかは、患者さん一人一人で異なりますので、適切なインスリンの種類、量はそれぞれの患者さんによって違うわけです。例えば、インスリンがほとんど分泌されない患者さんではどうすればいいのでしょう。図３の太線のように、食事の血糖上昇に対応して、速効型インスリンを各食前に注射し、寝る前には基盤となるインスリンを補うため、中間型か持続型のインスリンを注射すれば、健康な人のインスリン分泌とほぼ同じようになることがわかります。インスリンが、ある程度自分の膵臓から分泌されている患者さんでは、図３の細線のように、朝食と夕食の前に中間型もしくは混合型インスリンを注射する方法もよく行われています。　＜＊図３は省略しています。＞

『やさしい糖尿病の自己管理』

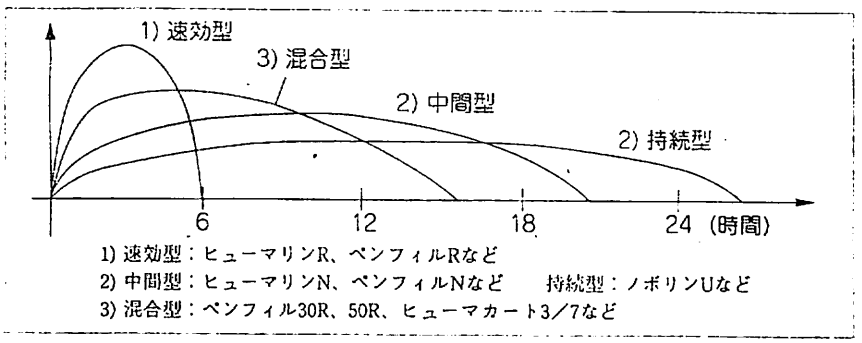


図１　インスリン製剤の作用時間

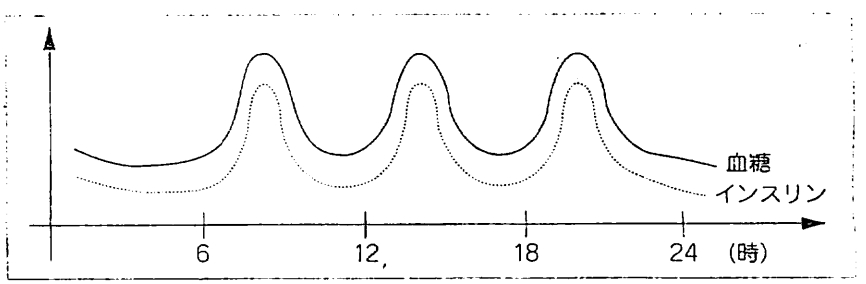


図２　健康な人の血糖とインスリンの変化

## 先月の練習問題の処理例

『減り始めた化学肥料の使用量』

**図６－２の例**

ａ案

『図6-2　世界の化学肥料使用量1950-95年、出所（巻末の注８を引用する）説明、1950年から95年までの世界の化学肥料使用量を示した折線グラフです。大まかな数値を読みます。1950年1400万トンから、1989年１億4600万トンまで、多少増減がありますがほぼ一直線の伸びを示しています。1989年以後減少し1995年には１億2200万トン程度になっています。説明終わり。』

★挿入場所　－１７行目・・・五分の一以下になっている、のあとに入れる

ｂ案

『図6-2　世界の化学肥料使用量1950-95年、出所（巻末の注８を引用する）　以上の本文にあった化学肥料使用量の変化を折れ線グラフで示した図ですが説明は省略します。』

★挿入場所　－１４行目・・・（図6-2参照）の後に入れる

**図６－３の例**

『図6-3　中国、米国、インドの化学肥料使用量　1950-1995年　出所（巻末の注10を引用する）説明。1950年から95年までの米国、中国、インドの化学肥料の使用量を示した折線グラフです。大まかな数値を読みます。米国では1950年450万トン、以後ほぼ増加を続け1981年頃2100万トンで最大使用量を示し、以後増減をくり返し95年には2000万トンとなっています。中国では1950年から60年頃までは100万トン以下ですが、以後徐々に増加し77年頃700万トン。以後急激に増加し、1985年にはすでに横ばいとなった米国を抜いて増加をつづけ、94年頃2900万トンとなり95年には2800万トンとなっています。インドでは中国と同様1950年から60年頃までは100万トン以下ですがその後徐々に増加し、1995年には1400万トンとなっています。説明終わり。』

★挿入場所　最後に入れる

**編集ボランティア募集**

盲人情報文化センターでは蔵書になる録音図書は編集をしています。編集の仕事は校正も兼ねながら、雑音を取ったり、レベルを合わせたり、トーンインデックスを入れたりする仕事です。機械操作は週１回２時間のレッスンで２ヶ月くらいかかります。編集作業に興味をお持ちの方は録音製作の清水までご連絡下さい。

## 二通りの読みがあって意味が異なるもの　（５０

| | | | |
|---|---|---|---|
| 端 | ハシ　事の起こるはじめ、端緒、へり、ふち、はじ、多くの中の一部分<br>ハシタ　どっちつかず、はんぱ、ある単位以下の数量。ちょうどの数に足りない分、又は余った分。 | 懺悔 | ザンゲ　キリスト教で罪悪を自覚しこれを告白し悔い改めること。<br>サンゲ　（仏）懺悔懺悔（ザンギサンゲ）　過去に犯した罪を神仏や人々の前で告白して許しを請うこと。 |
| 粉粉 | コナゴナ　こまかく砕けたさま<br>フンプン　入りまじって乱れるさま（諸説紛紛） | 取得 | シュトク　所有とすること、手にいれること。<br>トリドク　取っただけ自分の利益になること。 |
| 若気 | ワカゲ（ギ）　年若い頃のはやり気、また無分別にやけ<br>ニャケ　若衆、男子の色めいた姿をしたさま | 生成 | キナリ　素朴。飾り気のないこと<br>ナマナリ　未熟なこと。未完成なこと |

## 『言葉に関する問答集』文化庁編より

### 「免れる」は「まぬかれる」か「まぬがれる」か

（答）例えば、「責任を免れる」というとき「マヌカレル」とすんで読むか、「マヌガレル」と濁って読むかという問題である。

日本国憲法では、「全世界の国民が、ひとしく恐怖と欠乏から免かれ、平和のうちに生存する権利を有することを確認する」とあり、送り仮名によって、すんで読むべきことが分かる。（ただし、「送り仮名の付け方」（昭和四十八年内閣告示）では、「免れる」と書くことになり、送り仮名だけからは、清濁どちらに読むか、はっきりしない）

十世紀の古辞書『類聚名義抄』には、「マメカル」とあるので、古くはすんでいたらしい。それが、「メノカル（目避）」「マノガル（目逃）」「マノガル（間逃）」「マヌカル・マヌガル（間抜・間脱）」などの語源説が生じ、室町時代ごろから濁音形が現れたようである。

ところが、十七世紀の『日葡（ニッポ）辞書』には「ニンゲン　シャウジヲ　manucare（マヌカレ）エズ」とあり、清音である。『和英語林集成』をはじめ、『言海』『日本大辞書』『大言海』など、「まぬかれる」の見出しがなく、「まぬかる」で載っている。いずれも清音であるが、『日本国語大辞典』では、「まぬがれる」を見出しとして立て、その解説に「古くは清音」とあるだけで、「まぬかれる」は見出しに掲げていない。現行の国語辞典では、「まぬかれる」を見出しとし、意味解説のあとに、「まぬがれる」と付記しているものが多いが、「まぬがれる」を空見出しとしているものもある。

『常用漢字表』（昭和五十六年十月内閣告示）には、「免」の訓に「まぬかれる」を掲げ、備考欄に「『まぬがれる』とも。」とある。

『NHK用字用語辞典第二判』も、「まぬかれる」を見出しとし、「（注）『マヌガレル』とも。」としている。

『語形確定のための基礎調査』（昭３１国立国語

研究所年報７）によれば、学識経験者七十名の回答で、「マヌカレル」「マヌガレル」ともにほぼ同数。東京には「マヌカレル」を一般的とするものが多く、関西には「マヌガレル」を一般的とするものが多いという傾向がみられる。

## 文語の「ねがふ」は、どう読むか

（答）文語の例えば「ねがふ」を読む場合、「ネガウ」と読むか、「ネゴー」と読むかの問題である。

上代では「祢加不」のように万葉仮名で書かれており、文字どおり「ネガフ」（正確には現代語音と少し違う）と発音していたと思われるが、平安時代には「ネガウ」となり、更に「ネゴー」のように発音することになった。

同様の例をもう少し挙げると、

| | | | |
|---|---|---|---|
| あきなふ | アキノー | あぢはふ | アジオー |
| あしらふ | アシロー | あつかふ | アツコー |
| あらふ | アロー | いはふ | イオー |
| うかがふ | ウカゴー | うけがふ | ウケゴー |
| うしなふ | ウシノー | うたがふ | ウタゴー |
| うったふ | ウットー | うばふ | ウボー |
| うやまふ | ウヤモー | うらなふ | ウラノー |
| おぎなふ | オギノー | おこなふ | オコノー |
| おとなふ | オトノー | | |

これら「ねがふ」以下の語は、今日の口語では、ネガウ、アキナウ、アジワウ、アシラウ等のようにアウの類の発音になるが、文語としては、やはり、ネゴー、アキノー、アジオー、アシローのように長音にするのが伝統的な読み方と言えるであろう。具体的には、例えば、「統師し給ふ（タモー）」「一にせんことを庶幾ふ（コイネゴー）」「前にそびえ、しりへに支ふ（サソー）」のようなのが文語の読みくせである。これは中世の発音を保存したものであると考えられる。

十七世紀の歌学書『耳底記（にていき）』（細川幽斎口述、烏丸光広筆記）に、

一問、或（ある）人あふげばを、王（おう）げばとよむ、如何（いかん）。
　答　あし、あふげばとよむべし。

とある。これは、「あふげば」を「王げば→おうげば」と読んでいいかという問いに対して、「よくない。あふげばと読みなさい。」と答えたものである。このころには、一般に、「あふ」が「オー」のように、一つの長音になっていたことを示すとともに、「あふぐ」について「オーグ」と読まないのが特例であったことを示していると見ることができる。

なお、口語でも、「能う（アトー）限り」「笑う（ワロー）べき」「紛う（マゴー）かたなき」などのような文語的な色彩の濃い表現は、伝統的な読み方で言われるのが普通である。「願う（ネゴー）でもないこと」も同様であるが、最近では「願ってもいないこと」などと言う人も多い。

## 利用者から製作依頼を受けている原本

以下のリストは、読者から音声訳の依頼を受けている本です。引き受けて頂ける方がありましたらご連絡ください。始めてのグループの方は何か５分でも結構ですから録音したものをご持参下さい。録音状態をチェックさせていただいてから録音にかかっていただきます。

| 書　名　＜分類＞ |
|---|
| 『わたしの怖い体験　本当にあった心霊現象』＜心霊研究＞　文庫本220頁 |
| 『ディスカバリー世界の実相への接近』＜宗教＞　B5判 308頁 |

『空海の霊言』善川三朗著＜宗教＞　B6判　218頁
『現代の聖餐論』神田健次著＜宗教＞　B5判　360頁
『目で見るリハビリテーション医学』　＜医学＞ A4判110頁
『気で治る本　日本の［気の医療］最前線』＜医学＞　B4判 248頁
『ヨセフとその兄弟　II』　＜宗教＞ B4判 620頁
『ヨセフとその兄弟　III』　＜宗教＞ B4判 562頁

## 今回引き受けて頂いた原本とグループ

| | |
|---|---|
| 『入門Windows95』（入門コース） | パソコン音訳研究会 |
| 『あした天気にしておくれ』岡島二人著＜小説＞ | ICCBﾘｸｴｽﾄ音訳チーム |
| 『キリスト教の弁証』東京神学大学神学会編＜宗教＞ | 〃 |
| 『エコシステム農法の奇跡』＜農業＞ | 〃 |
| 『スウェーデンの経済　福祉国家の政治経済学』 | 〃 |
| 『意中の歌人たち』石野勝美著　＜詩歌＞ | ﾃｰﾌﾟﾗｲﾌﾞﾗﾘｰにしのみや |
| 『野の琴』藺草慶子著＜文学＞ | 〃 |
| 『ラスト・コヨーテ』上・下　ﾏｲｸﾙ・ｺﾅﾘｰ著 | 〃 |
| 『行方克巳句集』行方克巳著　文学 | 〃 |
| 『家族シネマ』柳美里著　＜文学＞ | 〃 |
| 『いのちの輝き』ﾛﾊﾞｰﾄ・C・ﾌﾙﾌｫｰﾄﾞ、ｼﾞｰﾝ・ｽﾄｰﾝ著 | みなわ |
| 『坂本龍馬の霊験』善川三朗著＜宗教＞ | えくてもあ |
| 『ソクラテスの霊言』善川三朗著＜宗教＞ | 〃 |
| 『キリストの霊言』善川三朗著＜宗教＞ | 〃 |
| 『やさしい糖尿病の自己管理』大阪大学医学部＜医学＞ | 〃 |
| 『地球への求愛』　＜自然科学＞ | 〃 |
| 『エヴァン・スコットの戦争』ﾐｯﾁｪﾙ・ｽﾐｽ著＜小説＞ | 〃 |